

土地改良区の地域用水機能増進に向けた活動とその評価

—鳥取県大井手土地改良区の事例—

水利用学 東 由里絵

キーワード：アンケート調査、大井手用水、保全意識、地域性

1. はじめに

大井手用水は、400年以上前に造成された全長16kmの地域用水機能を有する農業水利システムである。近年、地域環境の形成、農業用水への地域支援制度の確立などを課題とし、地域用水機能を有効活用する動きが全国各地で見られている。大井手用水地区でも平成16年度から地域用水機能増進事業が開始され、イベント活動が行われてきた。平成20年度にイベントに関するアンケートを小学生を対象に行った結果、イベント参加によって大井手用水に対する保全意識が高まることが明らかにされている¹⁾。一方で、各イベントの効果や保全意識の持続性は明らかにされていない。そこで本研究では、保全意識の持続性を明確にすることを目的とし、イベント対象地区の小学生、中学生にアンケート調査を行った。また、各イベントへの参加による意識変化を明らかにし、今後の活動に向けて一つの指針を提案した。

2. 調査概要

平成21年11月中旬から下旬にかけて、大井手用水の認知度、イベント、清掃活動、大井手川への要望について大井手用水受益地区内（受益面積640ha）の小学校6校の4,5,6年生、中学校3校の1,2,3年生を対象にアンケートを実施した。アンケート対象校を図1に示す。

3. アンケート調査結果

アンケート回答者数は、小学生662人（回収率96.4%）、中学生556人（回収率は85.1%）である。農家の割合は、上流部では54.2%、中流部では48.6%、下流部では30.0%という結果が得られた。上流部から下流部に向かうほど農家の割合が低くなることが分かった。また、全流域を合わせた農家の割合は、41.3%であり、農業地域である大井手地区でも混住化が顕著に現れている。

3.1 地域による認知度の違い

「大井手川を知っている」という回答は、上流部が77.7%、中流部が80.3%、下流部が31.4%であり、下流部に比べて上・中流部の方が認知度は高い。これには2つの理由が考えられる。1つは、上・中流部の小学校の方がイベント開催地に近く、授業の一環として大井手川を知る機会が多く与えられることである。2つ目は、地域によって大井手川の様子に違いが見られるためである。上・中流部の大井手川は水もきれいで、親水公園などもあり、川に親しみやすい環境である。それに対し、下流部は川幅が狭く、水も汚い。「親水経験はありますか」という問いに対し、上流部の河原第一小学校は48.4%、中流部の美和小学校は57.4%が「ある」と回答したのに対し、下流部の湖山小学校は同様の回答は4.3%しかなかった。このことから、上・中流部と下流部では大井手川への親しみやすさに違いがあることが分かる。この川への親しみやすさの違いが認知度の違いに現れていると考えられる。

3.2 イベントの効果

表2は、各イベントの趣旨を表している。また図2に、イベント参加後の意識変化の割合をイベントごとに示す。『ホタル鑑賞会』の参加者は「水を大切に思うようになった」という回答が36.8%であり、他のイベント参加者に比べると環境への関心が高まる傾向が見られた。一方、『大井手探検隊』の

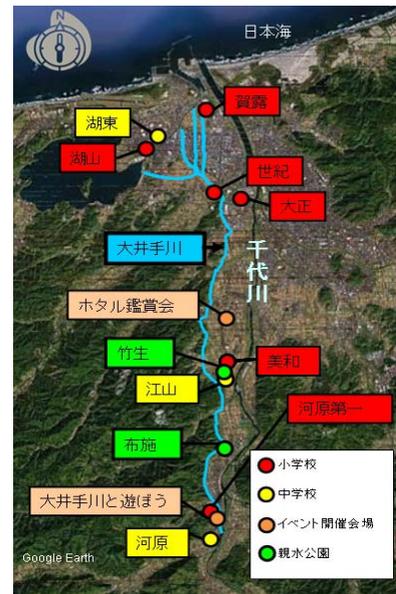


図1 大井手用水地区

表1 地域ごとの学校

上流部	河原第一小、河原中
中流部	江山中、美和小、大正小、世紀小
下流部	湖山小、湖東中、賀露小

参加者は「川がどのように利用されているか知った」という回答が 24.0%と、川の役割を知る割合が高くなった。『大井手川と遊ぼう』の参加者に関しては、「川は楽しいものと思った」という回答が 46.2%と、親水意識が高まる結果となった。これらのことから、各イベントでは、趣旨に沿った意識変化が参加者に見られた。

3.3 大井手川に対する保全意識の持続性

小学生、中学生のイベント参加の有無と保全意識の違いをそれぞれ図 3, 4 に示す。①は今までにイベント参加経験があり、今年も参加した人、②は今までにイベント参加経験はあるが、今年不参加だった人、③は今年初めてイベントに参加した人、④はイベント参加経験がない人、⑤は小学生、中学生、両方でイベント参加経験がある人、⑥は小学生でイベント参加経験はあるが、中学生では参加経験がない人を表している。なお、中学生になって初めてイベントに参加した人はいなかった。

図 3, 4 から小学校、中学校ともにイベント参加者の方が不参加者よりも保全意識が高いことが分かった。また、中学生の保全意識は 38.8%であり、小学生の 46.2%に比べて低い結果となった。これは、中学生になるとイベント参加率が 1.6%と皆無に等しく、大井手川に接する機会が減ったためと考えられる。このことから、川への保全意識を高めるためには、継続的な働きかけが必要であることが考えられる。また中学生で、今までに 1 度もイベントに参加したことがない人は 72.1%に上った。その理由の中でイベントがあること自体を知らなかった人が 54.3%と大きな割合を占めた。次いで、興味がなかったが 30.5%となった。このことから、大井手川の認知度を大幅に高め、更に興味を持ってもらうためには、中学生を対象に出前授業を実施することなどが効果的であると考えられる。その中で、イベントの紹介や参加への呼びかけを行うことで、よりよい広報活動が出来るのではないだろうか。

また、中学生を対象に、大井手川の役割について質問したところ、イベント参加経験者も未経験者も農業用水、歴史などの学習の場と認識している割合は高いものの、他の地域用水としての認識は低いことが分かった。よってイベントの中で農業用水だけでなく、他の地域用水としての役割を伝えるための工夫が必要である。

一方で、中学生になってからもイベントに参加し続ける保全意識の強い人が 1.6%いた。そういった保全意識の強い人に、次世代を担っていくリーダーの育成を目的として、主催者側の立場からイベントに携わるといった機会を与えてみてはどうだろうか。

4. まとめ

土地改良区が行っているイベントは地域住民に大井手川を周知させ、保全に向けた意識変化を促す上で重要、かつ効果的である。だが、継続的な意識への投げかけを行わなければ、保全意識が低下することが分かった。今後、混住化、後継者不足等による維持管理への不安は大きい。そこで小学生、中学生に周知させる機会を増やすと共に、各世代におけるリーダーを育てることが大切ではないだろうか。

参考文献

1) 大谷由貴奈 (2009) : 地域用水機能に対する住民の評価に関する考察, 平成 20 年度鳥取大学農学部卒業論文, pp13~18

表 2 イベントの趣旨

イベント	ホテル鑑賞会	大井手探検隊	大井手川と遊ぼう
趣旨	環境の大切さを教える	大井手川の役割、水路の仕組みを知る	川に親しむ

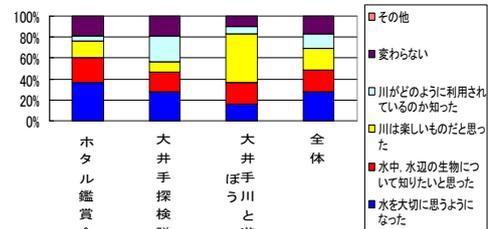


図 2 イベント後の意識変化

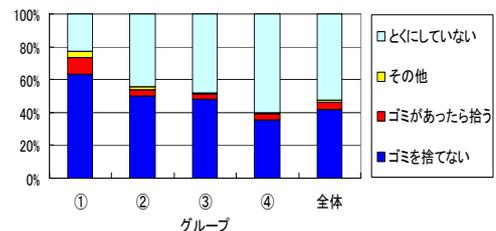


図 3 イベントの参加状況と保全意識の違い (小学生)

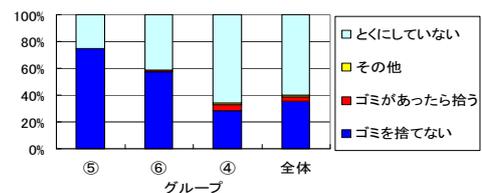


図 4 イベントの参加状況と保全意識の違い (中学生)